

2007年3月22日

蒼天社政治情報センター
代表・石川 鐵也 様

3月15日付「公開論議書」をいただきました。相変わらず議論する価値のないことの繰り返しですが、従来と同様、石川さんが示している項目ごとにお答えします。

なお、石川さんと私とのやり取りを私がネット上で公開していることについて、「小出さん自身、公開されたことを後悔しているものと推察されます」と石川さんはお書きですが、ご心配には及びません。余りに下らない議論ばかりで、お読みくださる方に申し訳ないとは思っていますが、石川さんと私の主張のどちらに理があるかは、読者に任せればよいと思います。

第13回分がネット上から消えているのご指摘は、その通りでした。第14回分を掲載するに当たって私がミスを犯したようです。お詫びします。今回、第15回目を掲載するのに併せて、第13回目も復活させます。ご確認下さい。

1. 当初から、石川さんは議論する相手の主張を理解するつもりがないようです。ご自分の思い込みを相手に押し付けるだけでは、議論が成り立ちません。もう何度も書いたことですが、日本には火力発電を中心として膨大な余剰設備があります。年間の設備利用率で言えば5割にも満たない、つまり半分以上は止めておかなければならないほど有り余っています。原発を即刻廃止しても電力供給には支障がありません。ただし、原発を止めれば、その分火力発電を動かさなければならないこともすでに何度も書いています。ただし、それは中期的なことなのであって、長期的にはエネルギーの消費量自体を減らすとともに、太陽エネルギーへの転換を図る必要があると、私は明確に書いています。地球温暖化の真の原因は、二酸化炭素にあるのではなく、エネルギーの大量消費自体にあるということも、すでに前回お答えしてあります。そして、原子力が二酸化炭素放出の低減に役立たずむしろ大量放出に繋がることもすでにお答えしています。議論をお望みであるなら、私の主張をしっかりと理解されたうえで、お書き下さい。
2. いろいろなエネルギー源に類似点もあれば、相違点もあることは当たり前のことです。石川さんがそう書かれたことに、特別、反論する必要もありません。ただし、原子力に関しては、何度も書いてきたように、リスクの大きさ、廃物の始末の仕方を知らないことだけをとりても、用いるべきでないとは主張しています。
3. 石川さんは、「現在における原子力発電の必要性は万人が認めるところであり」と書かれていますが、そんな事実はありません。すでに多くの人が原子力利用に疑問を持つ

様になっており、原子力から撤退する流れはますますはっきりしてきました。

4. どのようなエネルギー源を目指すべきかは、選択の問題です。利害、得失を分析した上で、少しでも合理的な選択をする必要があります。石川さんがどのように「断言」しようと石川さんのご自由です。しかし、科学が一步一步進歩することは、すべてのことについて言えることなのであって、原子力を選択することとまったく関係のないことです。核燃料サイクルなどに歴大な人材や資金を投入することは愚かなことです。
5. この項でも、石川さんは相変わらず、ご自分の思いこみを繰り返しているだけです。私は、前回の回答でも、「私はその施設を疲弊させられた地方に押しつけるのでなく、原子力の恩恵を受けてきた都会にこそ作るべきだと主張しています。その具体的場所として東京電力や関西電力など放射能のごみを生んだことに一元的に責任のある企業の地下を提案しています」と書きました。そして、それに続けて、「石川さんには、そうした提案が夢想論に見えるようです」と書きました。今回も石川さんは相変わらず、私の主張に「感情論」とレッテルを貼られてきましたが、石川さんがお好きな表現で書くならば、「感情論」とレッテルを貼って止めてはいけません。いったい何処の誰にこの問題の責任があるのか、きちんと議論すべきことです。望月・資源エネルギー庁長官は、高レベル放射性廃物処分場に応募した自治体について「予備的な調査とはいえ、受け入れた自治体には国のエネルギー供給の問題を国民を代表して考えてもらうことになる。自治体を二分するような議論も起こるわけで、相当大きな重荷を背負っていただく。その見返りに交付金を出すのは合理的だ」(朝日新聞、2007年2月25日朝刊)と述べました。しかし、自治体を二分するような議論を、疲弊した地方にカネの力で押しつけてはいけません。この議論を、国民を代表して考える責任は、何よりもエネルギーの大量使用をしている都会にあるのです。石川さんには原子力ブレーンの発言も猫に小判だったようですが、そのような人たちすら、「中間貯蔵施設」を東京に作ることを議論を始めようと提案しています。私は少しでもそうなるよう私の力を使います。思いこみだけで判断するのではなく、石川さんこそ読解力を高めることをお勧めします。
6. この項での石川さんの主張も「感情論」というレッテル貼りのご自分の思いこみによる「断言」だけです。石川さんは「地方であれ、都会であれ、議論を尽くせばいいのです」と書かれていますが、一方では東洋町での応募を歓迎しながら、都会が応募することは「感情論」と切り捨てており、論理がありません。私は、これまでもずっと書いてきたように、この問題は広く議論すべきことであり、何よりも情報を公開すべきと主張しています。その上で、特に議論する責任があるのは都会であり、それをしないまま、地方だけに議論を押しつけることに反対しています。

7. この項目で石川さんが書かれていることはまさに「言い訳」ですね。東洋町では、議会の反対、町民の6割を超える反対を無視して、町長単独で高レベル放射性廃物処分場の文献調査に応募しました。そのような行為は正しくないと私は思いますし、そんな応募を受け入れてしまう、国の姿勢に呆れています。東洋町や現行の国のやり方もすべては石川さんが書かれているように「これまでの結果」ではありますが、それを容認せずに変革していくという選択もできるのです。町を二分するような議論を東洋町の人たちに押しつけることは到底許せませんし、「黙って見守る」ようなことは決してしません。

8. この項では、すでに私から石川さんに言うべきことはありません。鳥取地裁が残土撤去の判決を出して以降、国が方面地区の戸別訪問をし、判決を無効にする内容の投票を地区総会で行わせたのです。石川さんはそれを「お願いであり、相談に外なりません」と言っており、政治情報センター代表としての資格がないと私は思います。ただし、石川さんがどのような行動を取ろうと私にはもともと興味がありませんので、ご自由におやり下さい。

なお、学問の価値についての評価は、芸術についての評価に優るとも劣らないほど難しいものです。石川さんもお存じのはずですが、年間数千億円の予算を使う動燃は方面地区で広がる汚染を検出しましたが、私は鉞口や貯鉞場、残土置き場から集落を越えて広がる汚染を検出し、公表しました。石川さんはそうした私の仕事がお気に召さないようですが、一方には、私の仕事を評価してくださる人もいます。私は自分に恥じないように仕事をしてきたつもりですが、もともと、私がどのような研究をするかについて石川さんに相談するつもりもありませんし、私の研究の価値について石川さんに評価をお願いするつもりもありません。私の仕事はすべて公開していますので、もし石川さんが必要だと思われるのであれば、学術情報の文献検索なり、ネットでの検索なりで、お調べ下さい。

以上

大阪府泉南郡熊取町朝代西2丁目1010

京都大学 原子炉実験所

小出 裕章

phone: 072-451-2458 (fax 兼用)

fax : 072-452-8193 (fax 専用)

e-mail: koide@rri.kyoto-u.ac.jp

URL : <http://www.rri.kyoto-u.ac.jp/NSRG/index.html>